

# 防木ジャーナル

THE BOSUI JOURNAL

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

6

2020

No.583



特集

- 多様化するシーリング材
- 道路橋床版防水の近未来

# 水が噴き出るサッシ鉄骨フレーム

鈴木 哲夫

今回、紹介するケースは、経過年数40年超のマンションで、写真1のようなサンルーム型のエントランスホールがあり、サッシを支えるフレームの境目や柱脚部(写真1右下)から水が噴き出てくると言う。これまでの修繕では、直し切れていないとのことであった。

外壁は、小口タイルのモルタル張りで、躯体精度が悪いためにモルタルの下地塗りがあり、タイル仕上げの厚さにバラつきがあった。外壁面に取り付けられたサッシ枠は、ステンレス曲げ物で、図のように納められている。

これを見て、タイル張りの裏に潜った雨水が、サッシ枠の中に浸透し、鉄骨フレーム裏に拡散する状態であることがすぐに分かった。取合いにシーリングはあるものの、シーリングの劣化だけではなく、タイル張りの裏に潜る雨水のルートを遮断しないと直らない納まりである。

処理部位は、サッシ枠の内部と鉄骨フレーム裏の連続した空洞であり、そこに水が回っているということだ。さらに、内部には鉄製のサッシアンカーなどがあり、腐食が進んでいる上に湿気も強いことから、鉄部の腐食抑止と内部をしっかり詰めるという、止水処理の条件を無視できない。

まず第一に、鉄骨フレーム柱脚部は腐食抑止処理を必要とするため、鉄部の防錆効果を期待して、亜硝酸リチウム入りの防錆グラウト材を30cm程度まで充填することにした。

ところが、サッシ枠内に縦樋が通っていることが調査で判明する。最下部のパイプ接続に隙間があると、注入材などが回って排水経路をふさぐ可能性があるため、内視鏡カメラを通して、縦樋接続部に隙間がないことを確認した後、グラウト処理を行った。闇雲に注入すればよい訳ではなく、注入による弊害はないか、検討する姿勢が重要である。

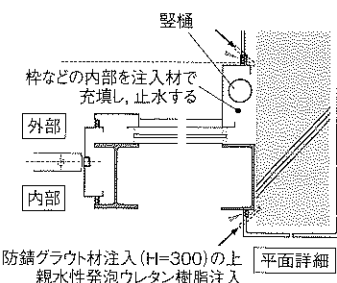
第2に、漏水ルートへの密実な充填が可能な材料の選定がポイントになる。水分または湿り気との相性が良く、複雑な隙間を詰められるため、写真2のように、親水性発泡ウレタン樹脂を全断面に注入することにした。

この事例のような、躯体とサッシの納め方に起因する不具合は、目立たない存在ではあるが、実際には結構な割合で発生しているように思える。ただ、水の出入口とされるシーリングの打替えに留まっているケースがほとんどで、漏水ルートの縁切りをきちんと行っていないれば再発を起しやすくなってしまふ。止水とは、漏水ルートをしっかりと遮断する処理のことであって、防水の表面的な処理に留まるものではない。

(南鈴木哲夫設計事務所 代表取締役)



写真1 水が噴き出る鉄骨フレーム壁際および柱脚(右下)



防錆グラウト材注入(H=300)の上  
親水性発泡ウレタン樹脂注入

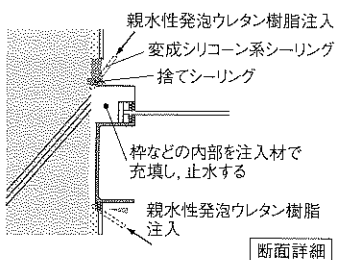


図 枠回り空洞部の止水処理



写真2 指定間隔で枠回りの止水注入(矢印)および樹脂注入口(右下)